

法政大学アカデミー合唱団は今年、50周年を迎えました。  
今から50年前、アカデミーはどのように生まれたのか、どんな合唱団なのか。  
アカデミーの生い立ちを簡単にご紹介したいと思います。

1962 法政大学アカデミー合唱団として発足  
(10月22日)  
常任指揮者・福永陽一郎先生

第1回定期演奏会  
(都市センターホール)  
「戯王」「パレストリーナ/ミサ・イステ・  
コンフェソール」「WEST SIDE STORY」  
「黒人霊歌集」



第1回定期演奏会

## ＜きっかけは1冊の楽譜、そして女子学生の涙＞

1958年のとある日のこと、二人の学生が電車の中で熱心に楽譜を読んでいた。

その隣では、細身で背の高い男性が彼らの開いた楽譜を気にしている。

「君たち、どこの学生だい？ 僕は指揮者なんだ」

二人の学生は法政大学混声合唱団（法混）の団員であった。学校に戻って顧問の教授に話してみると、その人はオペラ分野で活躍している著名な指揮者だという。

法混は創立5年目、常任指揮者や指導者をおかず、学生だけで活動していた。「もっとうまくなりたい、そのためにはぜひとも先生に指揮をしていただきたい。こんな駆け出しの学生合唱団を振ってもらえるはずがない、という声を振り切り、申し出た。

小さな偶然が、「陽ちゃん」と福永陽一郎先生を常任指揮者として迎えるきっかけとなったのである。

初めて練習会場に訪れたときのことを福永先生はこう書いている。

58年の12月、ちょうど法混は第3回の定演を終ったところだった。同好会が発足してから5年の月日が経っていたのだが、その間いったいどんな指導が為されていたのか、私は耳を疑った。音楽の基礎がまるでできていない。と言うより、音楽の基本がまるで無視されている状況であった。

そんな合唱団であったが、団員も先生も若く、情熱にあふれていた。「私がやるからには、日本一の混声合唱団にしてみせる」という福永先生の指導により、活動を広げ、大いに成長していった。しかし、成長途上の若い合唱団に大きな転機がやってくる。

福永先生が常任指揮者となって4年目、1年生のときから福永先生の指導のもとで歌ってきた団員が最上級生となり、合唱団としてさらなる一步を踏み出そうとしていた矢先のことだった。

時は1962年である。“60年安保闘争”の余波が合唱団を襲った。

法混のメンバーの中にも政治的自覚を持った団員がいた。その一団と幹事側との間に亀裂が生まれ、“合唱を利用して日本の社会を立派に変革していこう”というメンバーと、“聴衆を感動させる歌を歌いたい、そのための技術を身につけたい”というメンバーの間の溝は深まるばかりだった。誹謗中傷のピラがまかれ、暴力的な行為や暴言がないかと練習会場にもカメラやマイクを持ち込んで妨害するなど、闘争の手段は次第にエスカレートしていった。

練習も勉学もままならなくなっていたその頃、ある日練習場を訪れた福永先生は入り口で女子学生たちが泣いているのに出会った。ビケ(\*)が張られ、練習場へ入れないのだという。その光景が福永先生を決断させた。合唱団にあって歌うことをやめ、何の意味があるというのか。思い切って分裂しよう、そして歌い続けよう、と。

約1年にわたる紛糾はこうして幕を閉じ、新しい一つの合唱団を誕生させた。アカデミーの名をつけたのは福永先生である。

1962年10月22日、法政大学アカデミー合唱団が発足した。

4期が卒業すると、アカデミーの誕生を直接知る団員はいなくなった。しかし、今でも新入生は夏合宿でその歴史を聞くのが伝統になっている。私たちはどんな時代にあっても、歌うことが好きで音楽をすることを第一義としてきた、そういう団体である。その一員になったのだ、という誇りを胸に抱きながら、アカデミーライフが幕を開けるのである。

(\*) ビケ：大学闘争の頃、学生たちはバリケードを築いて授業をストライキした。保守派の学生を授業へ行かせないため、また敵が来ないが授業も監視役のこと。



1963 第一回演奏旅行  
(西条・広島・似島・松山)  
東京都合唱コンクール出場  
総合2位



第3回定期演奏会

1965 東京六大学混声合唱連盟加盟

1966 大久保昭男先生をヴォイストレーナー  
に招聘し、現在に至るまで、継続して  
ご指導を頂く。

第5回定期演奏会(虎ノ門ホール)  
「GESANGE ZUR FEIER DES  
HEILIGEN OPFERS DER MESSE」「日  
本のわらべ唄」「大中恩合唱曲集」「映画  
音楽集」「NEGRO SPIRITUALS」

## <アカデミー始動>

新しい合唱団として始動したものの、その活動は容易ではなかった。

文連(※2)を脱退したため、校舎内の教室が練習場所として使えない。周辺の小学校などを練習場所にしたが、携帯電話やe-mailなどももちろんない時代である、練習場所を知らせるために学生食堂をたまり場にして常に誰かがいるようにし、ほとんど授業にも出られなかった。

しかしそんなすさまじい中でも着実に練習を重ね、発足から1か月半、12月7日第1回目の定期演奏会が開催された。曲目は合唱組曲「魔王」、バレエストーリーの「ミサ・イステ・コンフェソール」、ミュージカルの「ウェストサイド物語」、ニグロスピリチュアルズと、名曲ぞろいの4ステージ構成である。これらのレパートリーはアカデミーでずっと愛され続け、この50年で何度も取り上ることになる。

そして翌年3月には初めての演奏旅行にも行っている。初めてのコンクールでは、東京都大会大学の部(A)優勝、総合第2位と大健闘し、アカデミーは好スタートを切った。

分裂の際に除名された六連(※3)にも1964年度には加盟が許され、毎年5月の六連定演、春～初夏の演奏会を始め、合宿(※4)などの国内のイベントも、4年目には現在まで続くアカデミーの年間行事のペースが固まった。

高校生までは運動部員だったメンバーも多いアカデミーのこと、中にはハイキングやスポーツの大会のような行事もある。ハイキングは1971年に山手線を一週、一晩かけて歩く山手一周ハイク(※5)へと変わり、野球にバスケットボール、サッカーなど様々なスポーツが盛んに行われている(※6)。

(※2) 文連：法政大学文化連盟。当初はサークル連合であった。

(※3) 六連：東京六大学混声合唱連盟。現在は青山学院大学グリーンハーモニー合唱団、慶應義塾大学混声合唱団、東京大学柏葉会合唱団、法政大学アカデミー合唱団、明治大学混声合唱団、早稲田大学混声合唱団(五十音順)からなる。

(※4) 合宿：春合宿(岩井海岸)、夏合宿(魔王)、秋合宿(岩井海岸)。1990年代からは早春合宿も始まった。ちなみに1974年に始まった魔王の夏合宿は、1年間(1976年)を除いて、ずっと続いている。

(※5) 山手一周ハイク：2年生が主体となって行う「2年行事」のひとつで、現在に続くイベントである。2年行事にはこのほかにも新歓BBQやダンスパーティー(通称ダンゾリ)、オークション、メンバー自己紹介紙「音の葉」の発行、演奏会の打ち上げ等がある。

(※6) 様々なスポーツ：初期のころには野球大会やバスケットボール大会が中心に行われていたようだ。ここ数年では野球をしたり、国内サークルAFA(アカデミーフットボールアソシエーション)が不定期に多摩キャンパスでサッカーをしているらしい。

1967 京都・鹿児島・沖縄(名護・コザ・那覇)  
演奏旅行



守礼の門の前にて

1968 第7回定期演奏会にて、  
カール・オルフの「カトゥーリ・カルミナ」  
をアマチュア初演。

1969 福永先生病気療養のため、  
関屋晋先生が常任指揮者代行に。

1970 学生運動激化のため演奏旅行を中止。



第10回定期演奏会での福永先生



第10回定期演奏会「運命の歌」  
指揮は畑中良輔先生  
ピアノは久瀬之宜先生

## <パスポートを持って>

5周年の1年間は格別な大きな盛り上がりを見せた。「ダグさん」こと大久保昭男先生をヴォイストレーナーに迎えたのもこの年の4月。5月の5周年記念演奏会を皮切りに全法政音楽祭やチャリティーショーなど数々のステージに出演し、コンクールでは都大会で初の総合1位、全国大会への切符を得た(全国大会初出場2位と好成績を残したが、1位を取れなかった悔しさはその喜びよりずっと大きかったようだ)。東京での定期演奏会を経て、満を持しての演奏旅行へ向かうため、団員たちはパスポートを申請し、ビザを取った。

行先は、沖縄だ。アメリカの占領下だった沖縄へ行くのは事実上の海外旅行であった時代である。沖縄へは船旅のため、真直ぐ行くのでは大変ということで沖縄に入る前に、東京から夜行列車で京都に入り京都エコーと演奏会をしてそのまま夜行で移動、鹿児島で鹿児島大フロイデアと演奏会をし、またしてもそのまま船中泊で沖縄へという、今では考えられないハードな旅程であった。

沖縄での演奏会は名護、コザ、那覇の3つの会場だ。かさむ費用を減らすため米軍からバスを出してもらい代わりに軍の中でも歌うことになった(※7)。沖縄だけでも6日間のうちに一般公開3回、テレビ出演2回、米軍関係3回と講習会を1回という強行軍である。

一足先に沖縄入りしたマネージャーは「うちなー一時間」に戸惑っていた。名護町長によると、前売りはさばききれないがそれはみな当日に買えばいいと思っているからだ、という。それぞれの会場に、どれだけチケットを用意するべきか、判断ができない。また、「うちなーんちゅ」にとって6時59分までは6時のうち、演奏会も定時には始められないという。

ふたを開けてみると、演奏会は想定をはるかに超える大盛況だった。定員300の会場に800、1,800の会場に2,200の人が集まる。プログラムはあっという間に売り切れた。演奏会が始まり最終ステージになってもなお客足が途絶えない。小さな公民館といった雰囲気の場合は熱気に包まれた。もちろん会場には入りきれず、外で聴いていく人も大勢いた。演奏が終わると外へ出て、歌いながら「ありがとうございました」と見送った。聴きに来ていた高校生が「法政へ遊びたい」という。「音楽によって地元の方と交流をした」という感激は忘れられないものであった。

米軍キャンプでの演奏会も、また忘れられない。黒人兵はニグロススピリチュアルズに喜び、一緒に歌ってくれた。おしまいになると報立ちでアンコールを求められた。口笛すらとびかう、大喝采だ。ベトナム戦争へ徴兵された兵隊たちとカタコトの英語で交流すると、日米両国の青年たちはお互いの境遇に思いをはせた。

このときの演奏に非常に感激した米軍当局からは、合唱団と大学総長あてに感謝状が贈られた。

帰りの船に乗る前に撮った集合写真には、堂々と中央に感謝状が掲げられたのだった。

(※7) 軍の中でも、広島出身の団員など、米軍キャンプの中で歌うことはできない、と演奏旅行に参加しないものもいたそう。また、軍の慰問をすることでベトナム戦争に加担することになるのではないかと疑問を抱く団員もいた。演奏旅行後に福永先生は、兵隊たちも同じ世代の日本の学生のコーラスを聴きながら平和への憧れをいっそう強くしたことを思う、と語っている。



1971 創立 10 周年記念第 10 回定期演奏会  
 <ブラームスの夕べ> (渋谷公会堂・現  
 渋谷 C.C.Lemon ホール)  
 「ドイツ民謡集」「ジプシーの歌」  
 「愛の歌」  
 「運命の歌」客演指揮・畑中良輔先生  
 ピアニスト・久邇之宣先生  
 ※久邇先生出演。これ以降、現在まで  
 40 年に亘りお世話になる。

1975 アーリーサマーコンサート  
 ※従来、「スプリングコンサート」、「ニュー  
 グリーンコンサート」と称していた前期の  
 コンサートをこの年より「アーリーサマー  
 コンサート」に改称し、現在に至る。  
 全日本合唱コンクール大学の部にて  
 金賞受賞 (混声合唱として初)  
 課題曲「ラシーヌの狂歌」・  
 自由曲「鳥よ」より

1976 全日本合唱コンクール連続金賞受賞  
 創立 15 周年記念第 15 回定期演奏会  
 「光る砂漠」「わたしの動物園」  
 「モーツァルト/レクイエム K626」

1977 全日本合唱コンクール  
 三年連続金賞受賞

1978 全日本合唱コンクール  
 全国大会招待演奏

1980 東京工業大学混声合唱団コンクール・  
 クライネスとジョイントコンサート  
 (1983 年にも開催)

1981 創立 20 周年記念フェスティバル  
 (郵便貯金ホール・現メルパルクホール)  
 第 20 回定期演奏会 (郵便貯金ホール・  
 現メルパルクホール)  
 「季節のたより」「幼年連弾」  
 「クレーの絵本第 2 集」「深き淵より」



第 20 回定期演奏会のリハーサルでの  
 福永先生

<ブラームスアーベント>

福永先生が病氣療養をされ、関屋晋先生(※8)を指揮者代行にお呼びしたり、  
 学生運動激化のためとうとう演奏旅行が中止になったりと、順風満帆とはい  
 えませんが、どうにかここまでこぎつけた、アカデミー 10 周年である。

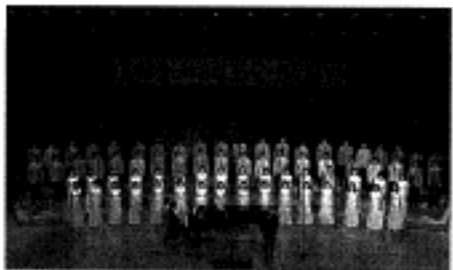
10 周年の定期演奏会には何か特別なことを、慶應ワグネルがワーグナー  
 ならアカデミーは・・・、ということで決まったブラームスアーベント(ブラ  
 ムスの夕べ)だった。

このとき、アカデミーは福永先生や大久保先生と同じように「この人なくし  
 てアカデミーは語れない」と言っているほどの大切な人に出会った。ひとステ  
 ージを受け持ってくださいと頼まれた畑中良輔先生に、ピアニストとして久邇之宣先生を  
 紹介していただいたのである。当時はまだ、国立音楽大学の学生であった。

久邇先生のピアノは「伴奏」の域を超えて「ピアノの演奏と合唱」という関  
 係に迫る、感動的なものであった。

そして、畑中先生とは法選時代以来の共演である。福永先生をお呼びして  
 初めての演奏会、一団体が全ステージを歌える実力のなかったために畑中先  
 生にソロ曲の披露をお願いしていたのだ。アカデミーとして活動を続けて 10  
 年、その畑中先生に今度は指揮をしていただけるほどに成長を遂げていた。

(※8) 関屋晋先生：第 8 回(1966)の定演でも「水のいのち」を振っていた。のちに離れるが、1991  
 年から 10 年間、音楽顧問を務めていただいた。ちなみに「水のいのち」は関屋先生のほか 10 周年スプリ  
 ングコンサートと六福華輪(1971)で北村隆一先生、翌年(1972)の演奏旅行で福永先生(その後もち  
 びたび取り上げられた)、さらに 2002 年の定演と演奏旅行では清井敬堂先生と、もだるる巨匠たちに何  
 度も歌わせていただいている珠玉の名曲である。



第 28 回全日本合唱コンクール全国大会で  
 混声合唱団として初の金賞受賞

<黄金時代、到来>

ところで、1966 年にコンクール全国大会に出場した後も、アカデミーはコ  
 ンクールに挑み続けていた。しかし、その年の 2 位を上回る成績を残せぬまま、  
 今年こそは、と思われた 1974 年でもついに 2 位に甘んじてしまう。

悔しさを抑えきれず、3 年次テノールとベースのパートリーダーだった 2 人  
 が「金賞を取るまで卒業しない」と留年を決めた。幸い 13 期の彼らは、5 年  
 で卒業できることになる。

選択制の課題曲にはフォーレの『ラシーヌの狂歌』を、自由曲には大中原  
 の『鳥よ』を選んだ。

その頃のベースはスタートダッシュは遅いものの一度覚えたらすごい力を  
 発揮する「黄金のベース」と言われたパートであった。そのベースパートから  
 始まる曲ならば絶対大丈夫、という意図での『ラシーヌ』の選択だ。そして、  
 自由曲の『鳥よ』では荒々しい嵐と苦悩、それが過ぎ去ったあとの静寂、夕  
 暮れ時の安らぎの音色・・・福永先生の音楽性に合唱は応え、その  
 境調子を上げていたアカデミーの実力が異観なく発揮されたステージとなっ  
 た。

おのずとついてきた結果は、大学の部、混声合唱で初めての金賞であった。  
 そこからは快進撃。「黄金のベース」の後には「テノール王国」が台頭し、3  
 年連続金賞受賞という快挙を成し遂げるのである。

さらに 4 年目には法政大学交響楽団を連れて招待演奏を行い、みな晴れ  
 やかな顔で舞台に立った。

1982 「幼年連携」レコーディング(東芝EMI・現EMIミュージックジャパンよりLPレコード発売、後にCD化)

アーリーサマーコンサート  
 <行ってきます、ヨーロッパ>

ヨーロッパ演奏旅行(第8回ヨーロッパカ  
 ンタータに日本代表として招聘)

1984 世界合唱祭  
 第1回アジア週間 in 長野

1986 第25回定期演奏会  
 (郵便貯金ホール・現メルパルクホール)  
 「信時操作品集」「祈りの虹」「海の構図」  
 「レスピーギ/主の降誕への賛歌」

1990 福永陽一郎先生ご逝去  
 福永陽一郎先生追悼演奏会

1991 第30回記念定期演奏会  
 (メルパルクホール)  
 「コタンの歌」「ブラームス/愛の歌」「十  
 びきのねずみ」「ドボルザーク/テ・デウム  
 ※瀬戸理恵子先生ソロ出演

音楽顧問・関屋晋先生/常任指揮者・田  
 中登志雄先生



第30回定期演奏会  
 ソプラノソロは瀬戸先生

1992 瀬戸理恵子先生を  
 女声ヴォイストレーナーとして招聘

第31回定期演奏会  
 「木下敦子/地平線のかなたへ」  
 混声版初演

1996 第35回記念定期演奏会  
 (メルパルクホール)  
 「ブルックナー/MESSE E-MOLL」  
 「Five Flower Songs」  
 「そよぐ幻影」  
 「メーリケの主題による追想詩『春』」

## <そして世界へ・・・>

20周年を迎えたアカデミーは成熟期を迎えようとしていた。福永先生の還暦記念ファミリーコンサート「陽ちゃんと一緒」に始まる数々の演奏会とコンクールと精力的に活動し、秋にはウィーン留学から帰国した久瀬先生を再びピアニストに迎えた。年明けには「新実徳英作品集」のため『幼年連携』で初のレコーディングを行っている(\*9)。

そして、20周年を乗り越えたその翌年1982年の年間計画には2つの“大事件”があった。ひとつは10年間連続出場をしていたコンクールへ出場しなかったこと、そしてもうひとつ、とにもかくにもヨーロッパ演奏旅行である。

3年に1度開かれる合唱の祭典、ヨーロッパカンタータ(於ベルギー・ナミュール)への参加を軸に、オーストリアやドイツの各地を歌い旅した。ハードスケジュールぶりはかつての沖縄演奏旅行に勝るとも劣らない。

- 1982.7.19 東京発
- 20 パリ→ウィーン
  - 22 カール教会演奏会
  - 23 ウィーン→ザルツブルク
  - 24 フランチスカーナ教会演奏会
  - 25 ザルツブルク→デュースブルク
  - デュースブルク合同演奏会
  - 27 デュースブルク→ケルン
  - ケルン大聖堂演奏会
  - 28 ライン下り
  - 29 ケルン→ナミュール
  - 30 ヨーロッパ・カンタータ参加
8. 3 ネイション・コンサート  
 (日本代表として出演)
- 4 アトリエ・コンサート
  - 7 オープン・シンキング
  - 9 ナミュール→パリ
  - 13 東京着



ウィーン カール教会にて

本場の空気に触れる、文字にすればたった9文字、しかしその背景には言葉にできないほどのカルチャーショックがある。

かの地には合唱が、音楽が、ごはんを食べ仕事や学校に出かけるのと同じレベルで生活に溶け込んでいる、ということを目で見て耳で聴いて肌で感じた旅であった。

そして文字通り空気が違う。乾燥した空気と高い天井の教会で歌うと、日本では聴きえない響きが聴こえた。ブルックナーの「Ave Maria」、日本では長すぎる空白に感じられたグネラルパウゼ(\*10)がなんと美しく響いたことか。この残響の中に、ヨーロッパ音楽の原点を見出したようであった。

教会やホールの美しい響き、そしてカンタータでは世界中の合唱人と作り上げるハイドンの音楽、歌のよるこびに満ちた日々は駆け足で過ぎて行った。この演奏旅行から得た見えないなにかによって、「アカデミー合唱団は合唱団になりました」とは福永先生の言葉である。

帰国後の練習では、誰ひとり、必要以上に「がんばる」といった精神的なこわばりがなく、無駄に声を出す者もいない。みんなが“合唱する”とは何かを知っている、そういう濃密な雰囲気のみながっていたという。

(\*9) 初のレコーディング「現代合唱曲シリーズ」新実徳英作品集として東芝EMI(当時)よりLPレコードを発売。その音源は現在財団法人日本宗教文化振興財団より発売のCD、合唱ベストカップリングシリーズ「新実徳英/幼年連携」にてお聴きいただくことができます。同時収録は松原清声合唱団(指揮・関屋晋先生)による同曲。

(\*10) グネラルパウゼ:全体の休止、すべてのパートが休止になる部分。ブルックナーの「Ave Maria」はこのグネラルパウゼが効果的に取り入れられたたいへん美しい曲である。



2001	アーリーサマーコンサートで小久保大輔先生を迎え、以後現在までアーリーサマーと定期演奏会のご指導を頂く。  第40回記念定期演奏会 (新宿文化センター) 「ブームス合唱曲集」「木とともに 人とともに」「海の囀り」「聖歌四篇」
2002	演奏旅行で浅井敬堂先生を迎え、以後現在まで定期演奏会と演奏旅行のご指導を頂く。
2003	アーリーサマーコンサートで北村協一先生を迎え、以後3年に亘ってご指導を頂く。
2005	関屋晋先生ご逝去
2006	戦後60年を記して、演奏旅行先の広島で、「折りの虹」を演奏。  北村協一先生ご逝去  アーリーサマーコンサートで、作曲家・源田俊一郎先生の客演指揮による「ふるさとの四季」を演奏。  第45回定期演奏会 (品川区総合区民会館 きゅりあん大ホール) 「イギリス民謡集」「万象」「愛の歌、新愛の歌」「思い出すために」
2007	アーリーサマーコンサートで、作曲家・荻久保和明先生の客演指揮による「季節へのまなざし」を演奏。
2008	アーリーサマーコンサートで、作曲家・新実徳英先生の客演指揮による「幼年連弾」を演奏。
2009	アーリーサマーコンサートで、作曲家・佐藤真先生の客演指揮による「蔵王」を演奏。
2011	瀬戸理恵子先生ご逝去 (6月16日)  50周年フェスティバル (7月10日) (昭和女子大学 人見記念講堂) 「新しい歌」「ブーランク/グロリア」「つながる～歴代学生指揮者が紡ぐ歌リレー～」 第50回定期演奏会 (11月27日) (東京オペラシティコンサートホール タケミツメモリアル) 「荻久保和明先生作曲による委嘱作品 合唱組曲『小さないのち』初演(予定)」ほか

### <突然の別れ>

1990年2月10日、アカデミーは深く、大きな悲しみにおそわれた。

福永先生ご逝去。

検査入院で異常なしの診断を得、退院したその日の夜という、あまりにも突然の死であった。福永先生に育てられたアカデミーにとって先生との別れほど悲しいことはない。最後のステージは第28回定期演奏会のイタリア・オペラ合唱曲集、そしてアンコールのThe impossible Dreamとクロージングソング、夜のうただった。

生前、福永先生は「金持ちが貧しい人の苦勞をわからないように、僕を失ってはじめてそのありがたさに気づくだろうね」と語ったことがあるという。それはこの日、現実のこととなってしまった。

もう福永先生の指揮で歌うことはできない……

深い悲しみを抱えながら新たな1年を迎えようとしていた。追悼演奏会に向けてOB合唱団が設立され、青春を共に過ごした仲間と再び歌えることは、卒業したOBにとって喜ばしいことであった。

30周年の年には関屋先生を音楽顧問、7期のOBでもある田中登志先生を常任指揮者に迎えた。

またその年に初めてソプラノソロでお呼びした瀬戸理恵子先生を翌年第31回の定演(\*11)で再びブーランクの「Gloria」ソプラノソロでお呼びし、その時から女声ヴォイストレーナーをお願いすることになった。少女のようにまっすぐ軽やかで、温かな先生の歌声は女声陣の憧れであった。

たくさんの人に支えられながら、アカデミーは歩み続けたのである。

(\*11) 第31回の定演：このとき、合唱曲集「地平線のからたへ」混声部の初演もされている。本日演奏する「響」はその第1曲である。

### <歌い続けて>

ここからは少し駆け足で追っていこう。

5年ごとのアニバーサリーの記念であった現役OB合同のステージは、1998年、アーリーサマーコンサートで関屋先生の「OBも一緒に歌いましょう」という呼びかけにより毎年の恒例ステージとなった。毎年一緒に歌う仲間として、現役とOBの絆はより一層強くなることになる。現役との合同ステージはOB合唱団に所属していないOBにも門戸が開かれ、毎年多くのOBが現役とステージを共にしている。

さらに、40年目のアーリーサマーコンサートではうれしい出会いがあった。アカデミーの親ともいえる福永先生のお孫さん、小久保大輔先生を指揮者として、この年から毎年お呼びすることになったのだ。

また、この頃から常任指揮者を置いていないながらも浅井敬堂先生には定演と演奏旅行、北村協一先生にはアーリーサマーコンサートと、次々にご縁が生まれていった。

45年目のアーリーサマーコンサートからは、作曲家による指揮シリーズとでもいおうか、OBとの合同ステージに作曲家の先生をお呼びして自作の曲を振っていただく、という試みもなされる。

その曲が生まれたその世界観をそのままに伝えられ歌うというめったにない経験に、現役もOBも胸をときめかせた。

そして今年、50年。ひとりひとりの4年間が重なり、積み上げられた50年だ。数々のうれしい出会いも悲しい別れもひっくるめて、厚く積み上がった50年。

しかし現役諸君、それを重く感じる必要はないのだ。君たちは前を向き、歌えばいい。そうして歌い、泣き、笑った4年間をそっとそこに重ねればいい。

我々は、どんなときでも歌を愛するアカデミー合唱団。

この先も10年20年・・・100年先も同じように歌い続けていると信じている。